

日本国の五辛

——善珠『梵網経略抄』とその周辺——

渡部 亮 一

はじめに

五辛とは、大乘仏教の戒律において摂取を禁じられた植物、それも野菜である。大乘菩薩戒の經典『梵網経』に記されたものが最も広く知られるが、日本では『養老令』の僧尼令に「凡僧尼。飲酒。食六五辛者。卅日苦使。」と定められている。その意味では、宗派を超えて禁じられた植物といえよう。

仏教經典はその本質として、一地域のローカルな言説ではなく、仏の教えが届くすべての国を対象とする。殺生や盗みを禁じるような諸戒も、国や言語の違いを超えて共有されねばならない。ただし五辛は、日々の食事で摂取される野菜であるため抽象化できず、各地域において具体的な種との同定が必要となる。その意味で、他戒とは異質な問題を抱えている。

その五辛が指す対象は、新エングレー体系でいえば主にユリ科アリウム属のいくつかの種、およびその栽培品種となる。ただしそれは、千年以上前の東洋における植物分類法とは根本的に異なっており、經典が規定する五辛と完全に一致させることは困難である。

そもそも植物の栽培は、気候、地質、地形などの条件に大きく左右される。日本列島や朝鮮半島、中国などのすべての地域で、同一の五種の野菜を栽培することは決してできない。そこで中国の『梵網経』注釈、あるいは本草書には、しばしば「北地」「江南」など、中原とは異なる地域に関する記載がみえる。それは諸書の書き手に、地域差の問題を解決しようという意識があつた証左といえるが、実際には申し訳程度の伝聞記事が附加されただけで、およそ解決には程遠い内容である。日本列島に至っては、そうした「地域」の範疇にすらなかつた。

本稿では日本における初期『梵網経』注釈である、善珠『梵網経略抄』を中心に、日本国の五辛同定の営みを考えたい。それは植物標本の収集や遺伝子鑑定という手法ではなく、經典の書写や注釈という実践によって五辛を発見するものである。その結果として善珠らは、中国や新羅と同様に、持戒可能な国、つまり仏の教えが届く国としての日本国をも発見している。

『梵網経』書写という創造

善珠『梵網経略抄』（以下『略抄』）は、八世紀末に亡くなつ

たとえられる法相宗の僧善珠による注釈テキストである。その内容は新羅の太賢（八世紀半ば頃に死去か）による『梵網經古迹記』（以下『古迹記』）に全面的に依拠しており、菩薩戒を記す下巻については義寂『菩薩戒本疏』（以下義寂疏）、法銑『梵網經疏』（以下法銑疏）との同文も目立つ。

それらの引用元を示すことは少なく、現代の感覚でいえば大半が盗用と判断される体裁である。そのため、オリジナリテイの希薄なテキストとして、近年では否定的な評価が目立つ。しかし善珠は先行注釈を機械的に写したわけではなく、取捨選択の跡は確認できる。そもそも、文字列のオリジナリテイの有無によって、菩薩戒という宗教実践のテキストを評価することが、果たして妥当なのかという疑問もある。

『略抄』の注釈元となった『梵網經』は、大藏經のような版本形態とは別に、敦煌などから多数の古写本が発見されている。近年はそれらの多くが公刊され、容易に披覧が可能となったが、夏安居などの実践作法と一体化した写本も多く、經典の書写が菩薩戒の実践と分かちがたく結びついていたことが分かる。しかも実際に校合してみると、同一の本はおろか、系統分類すら困難なほどに無数の異同がある。先行テキストを写すという行為自体が、それぞれ異なる菩薩戒の現場を出現させている。

そこで『略抄』の五辛検討にあたっては、当該箇所『梵網經』諸本の問題から考えていくこととする。

經 もし仏子、五辛を食むこと得ざれ。大蒜。革葱。韭葱。蘭葱。興渠。是の五種、一切食中に食むこと得ざれ。もし故に食

めば、輕垢罪を犯すとは。

經 若佛子不得食五辛。大蒜。革葱。韭葱。蘭葱。興渠。是五種一切食中不得食。若故食者。犯輕垢罪者。

〔略抄〕日本大藏經本による

ここでは「若故食」の「若」の有無など、他戒と関連する異同もあるが、紙数の関係で五辛の固有名の上に注目する。『令集解』に引用される『梵網經』も含めて、主な写本、版本、注釈類には次のように名前が列挙されている。

大蒜 革葱 慈葱 蘭葱 興渠

大正藏 資福藏 磧砂藏 普寧藏

永樂南藏 永樂北藏 徑山藏

高麗藏再雕本 東博旧法隆寺本

北京国家図書館藏敦煌写本（六種）

大蒜 革葱 慈葱 蘭葱 興渠

房山石經（隋唐期） 法苑珠林

法藏疏（注釈部）

大蒜 茗葱 慈葱 蘭葱 興渠

房山石經（遼金期・同別刻） 金藏

大蒜 茗葱 慈葱 蘭葱 興渠

乾隆藏、智顛疏（注釈部）

大蒜 革葱 葱 蘭葱 興渠

中村不折旧藏本

大蒜 革葱 薤 蘭葱 興渠

明曠疏（注釈部）

大蒜 革葱 韭葱 蘭葱 興渠

略抄日藏本 義寂疏 勝莊疏

芝苑遺編 古迹記（北京刻經処刊本）

大蒜 草 非葱 蘭葱 興渠

略抄大谷大学本

大蒜 茗葱 韭葱 蘭葱 興渠

国会図書館藏卷子本

大蒜 革葱 韭 薤 興渠

宮内庁書陵部藏本

大蒜 草葱 悲葱 蘭葱 興茆 令集解 (歴史民俗博物館蔵広橋本)
 大蒜 草葱 悲葱 蘭葱 興茆 令集解 (国会図書館蔵本)
 大蒜 草葱 悲葱 蘭葱 興茆 令集解 (国会図書館蔵本傍書)
 大蒜 草葱 悲葱 蘭葱 興茆 令集解 (鷹司家本)
 大蒜 草葱 慈葱 蘭葱 興蕒 令集解 (早稲田大学図書館蔵本)
 大蒜 草葱 慈葱 蘭葱 興蕒 令集解 (石川介版本)
 大蒜 角葱 慈葱 蘭葱 興蕒 令義解 (参考。慈葱角葱の順)

※対校諸本は補注参照。なお「蒜」と「蒜」「蒜」「葱」と「葱」は異体字として処理した。

大蒜と蘭葱はほぼ一致し、興蕒についても通用字、異体字の範囲に留まる。対象が何かはともかく、その名称に関しては揺れていないことが分かる。しかし他の二種は、かなり大きな違いが生じている。

草葱については、草葱、蒼葱、角葱、草葱の四種が確認できる(『略抄』大谷大学本の「草」は、書写の際に「葱」が脱落したと思われる)。うち三種は同音による表記混在とみられ、法蔵『梵網経菩薩戒本疏』には、「革」ではなく「蒼」が本来の用字と注釈がある。この説は大賢が引用、『略抄』にも採られている(後述)。

問題は「草」で、これは全く漢字音が異なる。「革」との字形相似による誤写と考えるのが自然だが、日本で書写された『略抄』大谷大学本、そして『令集解』の大半が「草葱」とあり、一写本の誤字とは言いがたい。他に大正蔵では凝然『梵網戒本

疏日珠鈔』に二箇所あり、日本の慧岳法師の『梵網経』注釈の引用部に「草葱」、法鏡『梵網経疏』引用部に「草念」とみえる。法鏡は法蔵の弟子とされる中国僧であり、「草」も中国由来の可能性が残るが、『日珠鈔』の法鏡疏は極めて誤脱が多く、日本で書写される中で生じた表記ではないかと思われる。

なお平安時代の資料とされる『本草和名』にも、「蕒」の一名として「草葱」がみえる。このような名前は中国の本草書になく、また日本の古辞書類にも管見の限りでは見いだせないが、「草葱」という表記が、日本では一定の範囲で認められていたことを物語っている。つまり、漢字音ではなく字形相似から新たな固有名が生じ、(実在するかはともかく)事実上の「新種」を誕生させたことになる。

揺れの大きいもう一つの種である韭葱は、中国写本などでは基本的に「慈葱」だが、新羅僧の義叔や勝莊の注釈、中国宋代の『芝苑遺編』など、大正蔵や統蔵に数例「韭葱」がみえる。ただしこれらは日本の版本によるとみられ、また注釈テキストに附記される経本文は後補の可能性が高いため、判断が難しい(『古述記』は後補、『略抄』も恐らくは後補)。

注目されるのは『古述記』の北京刻経処刊本が、注釈部も含め「韭葱」とする点である。大正蔵本『古述記』は経本文が省略されるが、やはり注釈部に「韭葱」とある。そしてこの注釈部分は、法蔵疏が「慈葱」について述べた内容の引用であり、意図的に字を変えた可能性が残る。

そもそも中国の本草書や医術書において、「慈葱」は『梵網経』由来と思われる少数の例しか記述がない。一方で「韭葱」とい

う固有名も見いだせないが、智顛『菩薩戒義疏』などには、五辛の旧説として「蒜・葱・興菓・韭・薤」が挙げられており、「韭」や「薤」が加わる余地は十分にあつた。本草書などには「韭葱蒜……」と羅列されることも多く、その意味でも不自然な文字列ではなかつただろう。

日本の『新撰字鏡』『倭名類聚抄』『本草和名』などにも「韭(韭)」はあるものの「葱」は一切ない。「韭葱」が本来の用字とまでは言いがたいが、それなりの支持を得た異説であつたことは間違ひなからう。

なお日本の一部の写本にある「韭」「葱」は、「草葱」と同様に、基本的には「韭」の字形相似による例とみられる。「韭」は『詩経』にも見える植物名で、『爾雅』に「韭、芴。」とあり、『新撰字鏡』は「薄」で、いずれもネギやニラの類ではない。

これらの文字には「草葱」ほどの広がりがなく、広く認められていたとは言い切れない。ただし字形相似によつて変化しただけの文字が、新たに漢字音の同音による表記混在を生み出す点が目される(注釈部で再び述べる)。

こうした五辛の表記の揺れは、遠く離れた諸地域間で、植物に関する知識が共有しきれていない状況に起因するだろう。書物としての經典とは異なり、生体の植物を異國に伝えることは難しい。まして、食用を禁じた植物をわざわざ取り寄せはしないはずだ。

しかし同時に、「漢字」で書かれた經典文字列に対して、日本ではその漢字音が必ずしも共有されていない点に注目したい。ここからは經典文字を、音読前提の「漢字」として捉えて

いたのかという疑問が生じる。この疑問は、『略抄』注釈部をみることで、さらに明確にならう。

『略抄』注釈部の文字表記

第四、食五辛戒なり。五辛は草と雖も臭穢親しみ難く、賢聖の避くる所なり。所以に之を制む。法藏師云く、今此五中に、大蒜は家蒜なり。有人の説く、韭葱は是れ胡葱、蘭葱は是れ家葱なり。上の三つは是れ人間の常に食むところなり。草葱は『爾雅』に云く山葱なり。茎細く葉大なり。応に茗字と為すべし、草には非ざるなり。北地に有り、江南に無し。

或は云く、草葱は是れ薤なり。葉は薤に似て而も厚し。倭に奈売欄良と言ふ。薤の音は下戒の反。葱葱は、韭の音は居有の反。『集略』に云く、薤に似て長し。白色なり。『本草』に云く、韭は味辛酸、温、無毒なり。五臓を安んじ胃熱を除く。倭に多大美良と言ふ。

渠は、『五辛経』中に云く苔台なり。是れ倭に平治舌と言ふ。有説に、江南に葉の野蒜に似て、根茎の韭に似るあり。北地に無き所なり。(以下略)

第四食五辛戒。五辛雖草臭穢難親。賢聖所避。所以制之。法藏師云。今此五中。大蒜家蒜也。有人説。韭葱是胡葱。

蘭葱是家葱。上三是人間常食。草葱爾雅云山葱。莖細葉大。應爲茗字。草者非也。北地有。江南無。或云。草葱是薤。

葉似葱而厚。倭言奈賣欄良。薤音下戒反。葱葱。韭音居有反。集略云。似薤而長。白色。本草云。韭味辛酸温無毒。安五

臟除胃熱。倭言多大美良。渠者。五辛経中云。苔臺。是倭

言乎治舌。有説。江南葉似野蒜。根莖似韭。北地所無。

※左は本稿に関連する校異

- (一) 草—草 (大谷本)
- (二) 薺—薺? (大谷本)、薺 (義寂)
- (三) 悲—韭 (義寂)
- (四) 厚—日藏「庫」。大谷本や義寂疏による。
- (五) 薺—薺? (大谷本)、薺 (義寂)
- (六) 悲—非 (大谷本)
- (七) 薺—薺? (大谷本)
- (八) 温—日藏「混」、大谷本は判読不能。「新修本草」による。
- (九) 苔—芸 (法鏡)

『略抄』の注釈内容は、一部以外は太賢『古迹記』による。その太賢は法藏疏を挙げて注釈したため、結果として法藏の名のみ見えている。他に義寂疏からは「或云。草葱是薺葉似韭而厚」、法鏡疏からは「五辛經中芸薑是」のみ引用。

先行注釈に見えないのは『(文字) 集略』(『新修』本草) 引用部分と、漢音や倭音に関する注記である。両引用書は日本の古辞書にもしばしば引用され、また倭音は『新撰字鏡』と概ね一致する。古辞書を作るプロセスとの関わりが想定される。

五辛の表記については、大谷大学本は経本文同様に「草葱」がすべて「草葱」とある。そのため先述した法藏疏部分が、「草」ではなく「薺」が正しいという、いささか首をかしげる説明になってしまっているが、いずれにせよ同本において「草」が誤記でないことが分かる。

「韭葱」は「悲」が全面的に用いられる。経本文に「非」とある大谷大学本は、注釈では「悲」「非」が混在する。このうち、両本が「悲」で一致するのは義寂疏「似韭」の部分である。この「悲」は悲しむという意味の文字だが、「非」の異体字ともされる。いずれにせよニラ類との関係は見いだせない。「悲」「非」の漢字音は同音であり、先にも少し触れたように、一旦は字形相似で変化した文字が、日本において新たにこのようなヴァリエーションを生じさせたことになろう。

義寂疏の部分には、もう一つ大きな文字の相違がある。それが「薺」で、大谷大学本は「薺」のような字だが、同一字の可能性はある。これは義寂疏の「薺」に相当する。「薺」は字書類に見いだせず、どのような文字か不明。「薺」とは字形もそれほど似ているとは言いがたいが、少なくとも漢字音が同音である可能性は低い。

法鏡疏の部分にも大きな相違がある。「苔台」は日藏本傍書に「イ芸」とあるように、「芸台(雲台)」が本来の表記。しかし日藏と大谷大学本がいずれも「苔台」で、単純な誤写とは言いが切れない。もちろんこれも、字形相似による変化であろう。総じて注釈部の文字表記は、経本文以上に複雑化している。

日藏本と大谷大学本は、付せられた経本文の系統が異なるなど、一定の隔たりが存在する。大谷大学本は誤脱が多く、あまり質の高い写本ではないことに留意しなければならぬが、両本に共通する「悲」「苔台」のような表記は、単純な誤写ではなく、ある範囲で認知されていた可能性がある。こうした文字遣いが、善珠自身まで遡れるかはさておき、先の『令集解』も合わせて、

日本国において、五辛を文字の字形から考える環境があったことは推測できよう。

『略抄』注釈部には、その認識の手法に関わる記述もある。最後にそれを確認しておきたい。

經典文字と異言語音

先にも触れたように、『略抄』には漢音と倭音に関する注記がある。これらは言うまでもなく経本文の文字に対応しており、文字と音の結合が意図されている。

倭音はナメミラ（蕪）、タタミラ（韭葱）、ヲチ（興渠）の三種がある。残り二種は経本文でもほとんど揺れのなかった大蒜と蘭葱で、注釈自体も「人間常食」の「家蒜」「家葱」と極めて短い。注釈が必要な野菜ではなかった、という認識であろう。ちなみに、『略抄』第十三軽戒では「伯」に「□平治」、「叔」に「於等平治」と倭音の注記があり、第四軽戒のみに音訓表記があるわけではない。しかし『梵網經』の無数の固有名の中では、極めて例外的なものである。

一方、漢音は蕪と韭の二字について半切が記される。こちらにも『略抄』第十九軽戒に「遘音古候反」などがある。この「遘」は『梵網經』諸本でも「構」「構」と表記が大きく揺れている箇所、難読文字としての音注と考えられる。

このような両音の併記は、善珠『成唯識論述記序釈』にもみえる。もちろんそれは古辞書の一般的な手法だが、仏典注釈テキストにおいては、經典文字に対して二つの異言語を等しく配置する、という関係を生み出している。つまり「漢字」と漢字

音がアプリオリに結びついた形の先行諸注釈に対して、それらとは異なる新たな認識を示しているのではないか。

其の興渠は、有説に芸台是なり。然るに未だ誠文を見ず。有説に、江南に葉の野蒜草に似て、根莖の韭に似るあり。亦薯老子と名づけ、子無し。北地に無き所なり。又釈していはく、其の阿魏は葉の梵語なり。興渠と名づく。將に謂く、是は此の辛臭物の苗葉なり。

其興渠。有説芸臺是也。然未見誠文。有説。江南有葉似野蒜草。根莖似韭。亦名薯老子。無子北地所無也。又釋其阿魏藥梵語。名興渠。將謂是此辛臭物之苗葉。

（法藏『梵網經菩薩戒本疏』）

中国や新羅の『梵網經』注釈にも、經典文字と異言語音を結合させるような箇所は存在する。法藏疏において興渠が「梵語」の「阿魏」とつき合わされているのがそれで、法統疏ではこれを「梵音」とする（『梵網戒本疏日珠鈔』引用）。新羅の義寂や勝莊の注釈にみえる「婆羅門語」も、「阿魏」であろう。

この「阿魏」は『西陽雜俎』や『新修本草』に記載があり、日本の『本草和名』にもみえる。北村四郎²⁰によれば、現在はセリ科の多年草とされる種で、アフガニスタンやイランで栽培され、生薬としては今でも阿魏の名で流通するという。

經典や注釈において「梵語」はしばしば特別な価値をもっており、ここでの注記もそうした意味でなされたようにみえる。また、仏教誕生の地である中インドにおいて、五辛とは何を指

しているか、という問題意識があったとしてもおかしくはない。しかし『梵網經』は中国成立の疑いが濃厚な經典で、少なくとも梵字經典が回つた形跡はない。そして中国や新羅の諸注釈に、興渠以外の種の「梵語」は何も記載がなく、また漢音の注記も一切ない。

要するに、「阿魏」を挙げる諸注釈は、中国とインドの野菜の対比を意図したわけではなかった。興渠は中国以外の地で生産され、葉草として持ち込まれていた。その産地由来の名として、中インドの名称を挙げたに過ぎないのである。

こうした他国の注釈と『略抄』を比較すると、『略抄』が漢音を異言語音として扱っていることが改めて明確となろう。しかも、法藏疏を経て『古迹記』にも記される「阿魏」を、『略抄』はその部分のみ省いている。善珠にとって「阿魏」の問題は、音注とは異質のものであった。

中国や新羅の注釈にとつて必要のない古辞書の手法をあえて持ち込み、經典文字Ⅱ「漢字」という結びつきを切り離す。それは、「草葱」や「悲」など、漢字音を無視した字形相似による変化の問題とも、その性質を一にしていよう。

おわりに

以上、五辛をめぐる『梵網經』とその注釈における固有名の問題をたどつてみた。中国や新羅の經典写本及び注釈に対して、日本のそれには、誤字としか見えない例が多数存在する。しかしそれらの奇妙な表記は、一書写者の誤写というレベルを超えて、一定の広がりをもっている。さらにこの問題と、善珠『略

抄』における倭漢二音の併記という注釈手法には、經典文字と漢字音を切り離すという共通点を指摘できる。

『梵網經』を先に受容した中国や新羅では、經典文字Ⅱ「漢字」であることに疑問を挟む余地はない。しかし日本国において漢字音は異言語音であり、そのままでは五辛も異国の植物となる。經典文字と漢字音を切り離すことで、五辛を中国というローカルな地域からも切り離し、日本という別のローカルな地域における五辛を検討可能にしたのではなからうか。

善珠『唯識義燈増明記』では、仏の一言が人間諸言語を超越した言語であることが語られる。そのため、あらゆる人間諸言語(の国)には、等しく仏の教えを知るチャンスがあるという。ここでの手法も、『梵網經』写本の經典文字を、「漢字」を超越した文字と捉える点で、『増明記』の議論を実践した形になる。このような実践によつて、はじめて五辛は日本国の植物、野菜として位置づけられ、菩薩戒の持戒も可能となる。それは中国や新羅というローカルな地域に対して、同様に持戒可能な日本国という地域を新たに発見する営みであつたと思われる。

注(一) 実際に持戒するにあたっては、殺戒などにおいても、身分制度や家族形態などの違いが問題となる。諸注釈には、戒の適用除外事案や境界事案に関する記述が多い。

(2) 例えば、いわゆるカラシナやダイコンなどは、東洋諸国だけで百品種を超える。ネギ類については、アサツキなど、異なる種が同一名で呼ばれるという問題もある。

なお中国書におけるネギ類などの同定については、北村

- 四郎『齊民要術』の植物」「本草綱目」の植物」（いずれも「北村四郎選集」二一九八五）などを参照した。本書については『新修本草』（尚志鈞校注 安徽科学技術出版社 一九八二）、「本草綱目」上中下（劉衡如、劉山永校注 華夏出版社 二〇〇八第三版）などを参照している。
- (3) 『梵網經略抄』は日本大藏經本（旧西明寺所藏本）と大谷大学本（下巻のみ）が現在確認できる。凝然『梵網戒本疏日珠鈔』や定泉『梵網經古迹記補忘抄』などに一部が引用されており、中世まではある程度読まれていたらしい。
- (4) 義寂や法鏡など、『梵網經』の大半の注釈は下巻のみになされている。なお大谷大学本には「善注」、つまり善珠のオリジナルという書き込みが複数存在するが、該当箇所半数は法鏡注の引用で、法鏡疏の流通が稀であった事情が窺える。
- (5) 夏安居は『梵網經』の輕戒に言及があり、菩薩戒実践の場であった。
- (6) 『梵網經』諸本については近年、船山徹によって比較検討などが進められている。ただし船山氏の系統分類は、基本的には版本大藏經における目立った対立項に注目したものである。写本を含めた実際の諸本間の異同は、遙かに混沌としている。
- (7) 「革」と「草」は非常に似ており、横棒一本の違いしかないが、該当写本はすべて中央が「日」と確認できる。なお日本の古辞書に革葱はほとんど見えないものの、『類聚名義抄』観智院本の葱の項に革とあり、カクノキと訓まれている。
- (8) 法鏡『梵網經疏』は四分冊からなる注釈テキストだが、
- まとまった形で残る上巻の二冊はいずれも日本の写本で、下巻を含む逸文も、凝然『日珠鈔』や照遠『述迹抄』、そして『略抄』とすべて日本のテキストである。唐では早期に失われたとみられ、残存写本や逸文は、等しく誤脱だらけの状況である。
- (9) 『本草和名』は日本古典全集本、及び早稲田大学図書館所蔵写本によって確認した。
- (10) 『古迹記』諸本は、經本文を一部のみ記す大正藏のような形態と、全文掲載する江戸時代の頭注本などが存在する。このうち頭注本系統の經本文は、しばしば注釈部分と齟齬が生じており、明らかな後補である。また『略抄』は日本大藏經本と大谷大学本ともに經本文を全文掲載するが、両本の系統は異なり、また注釈との齟齬も存在する。
- (11) 韓国佛教全書が用いた北京刻經処本の詳細は不明だが、恐らくは二十世紀の民国期のもものと思われ、日本の版本の影響を受けた可能性がある。
- (12) 大正藏の法藏『梵網經菩薩戒本疏』は「葱葱」だが、対校本二本はいずれも「菲葱」。なお、三本すべて日本の版本を用いている。
- (13) 『新撰字鏡』は全国書房版（一九四四）の影印で確認した。
- (14) 『倭名類聚抄』は『箋注倭名類聚抄』及び国会図書館蔵元和三年古活字本で確認した。
- (15) 日藏には「イ」、つまり対校本らしき傍書が複数ある。大谷本の同一箇所注記はなく、「イ」本と大谷本も一致しない。日藏の底本である西明寺本の傍書と思われるが、詳細は不明。
- (16) 『略抄』には異体字らしき文字がまま見受けられるが、

これほど集中する箇所は他に存在しない。これを一書写者の問題とすることは妥当ではなからう。

(17) 興渠の倭音は、日藏、大谷本ともに「平治舌」だが、『本草和名』『医心方』など諸書は「乎知」。「舌」が何を意味するかは不明。

(18) 蘭葱は『本草和名』に「小蒜」とあるなど、本草書などで含めれば、諸書がネギで一致していたわけではない。しかし『梵網経』諸注釈では「家葱」と説かれている。

(19) 「□」は日藏では「一字欠字、大谷本は判読不能(恐らく書写者が文字を読めていない)。於等乎治(おとをぢ)に対する語で、「えをぢ」と想定される(『新撰字鏡』に「江乎知」。これらは「六親」の範囲を、日本国の家族制度上で規定するもので、訓読目的ではない。

(20) 善珠『成唯識論述記序釈』は基『成唯識論述記』の序に対する注だが、この序では、華梵の二言語間における翻訳について語られている(成唯識論)は玄奘と基によって翻訳された)。従って「序釈」の併記も、經典文字と諸言語の問題に絡むものといえる。

(21) 国訳一切経(大野法道校注)では「阿魏葉は梵語に興葉と名づく」と訓読するが、内容に合わない。

(22) 北村四郎『西陽雜俎』の植物記事(「北村四郎選集」二一九八五 初出一九六二)など。

(23) 新羅には新羅の言語があり、漢字音を異言語音として認識してもおかしくはないが、義叔や太賢の注釈に朝鮮語は見られない。玄奘三蔵の訳経事業に参加するなど、新羅僧は唐と往来可能な関係であり、日本国の僧とは世界観が異なるか。

(24) 善珠『唯識義燈増明記』における、仏の一言と諸国語言

語の関係については、渡部「仏典注釈を継ぐとは何か―善珠『唯識義燈増明記』に至る注釈活動を考える」(『古代文学』五一 二〇一二)、同「善珠『唯識義燈増明記』の「外道老荘」―注釈から生み出される歴史認識」(『佛教大学歴史学部論集』二二 二〇一二)などに述べた。

※本稿に用いた諸本について

『梵網経略抄』及び『梵網経』校合本は次の通り。なおこれらの諸本校合は、仏典注釈を読む会における『梵網経略抄』輪読の成果を用いている。

日本大藏経本(西明寺本)『梵網経略抄』…『日本大藏経(増補改訂)』三四 大乘律章疏一

大谷大学本『梵網経略抄』…大谷大学図書館蔵写本

太賢『梵網経古迹記』…大正蔵四〇・一八二五、北京刻経処刊本

(『韓国佛教全書』)

義叔『菩薩戒本疏』卷下…大正蔵四〇・一八一四

凝然『梵網戒本疏日珠鈔』…大正蔵六二・二二四七

法藏『梵網菩薩戒本疏』…大正蔵四〇・一八二三

(以降は『梵網経』諸本)

大正新脩大藏経本…『大正新脩大藏経』二四・一四八四

房山石経・隋唐期石刻…『房山石経』第二冊(華夏出版社)

房山石経・遼金期石刻…『房山石経』第十四冊(同)

房山石経・遼金期石刻…『房山石経』第十四冊(同)

金藏広勝寺本…『中華大藏経』底本(中華書局)

思溪資福藏…『中華大藏経』校異(大正蔵「宋」本)

- 宋磧砂藏：『影印宋磧砂藏經』第二百五冊（上海影印宋版藏經會）
 普寧藏：※中華大藏經の校異（大正藏「元」本）
 永樂南藏：※中華大藏經の校異
 永樂北藏：『永樂北藏』第七十六冊（錢裝書局）
 徑山藏：※中華大藏經の校異（大正藏「明」とされるが…）
 乾隆藏：『乾隆大藏經』第七十六冊（中国書店）
 高麗藏再雕本：高麗大藏經研究所データベース
<http://kb.sutra.re.kr/>
 宮内庁書陵部藏宋本：大正藏「宮」本
 東京国立博物館藏旧法隆寺本：国博ホームページ内公開画像
 国会図書館藏卷子本：国会図書館デジタルアーカイブ
 北京国家図書館藏敦煌写本 BD00271_2 (1436683)：『国家図書館藏敦煌遺書』四（北京図書館出版社）
 同 BD01972_2 (1436684)：『国家図書館藏敦煌遺書』二七（同）
 同 BD0108 (1436685)：『国家図書館藏敦煌遺書』二（同）
 同 BD04661_2 (1436686)：『国家図書館藏敦煌遺書』六一（同）
 同 BD02729 (1436708)：『国家図書館藏敦煌遺書』三七（同）
 同 BD02258_1 (1436718)：『国家図書館藏敦煌遺書』三二（同）
 中村不折旧藏本：『台東区立書道博物館所藏中村不折旧藏禹域墨書集成』卷上（二玄社）
 智顛『菩薩戒義疏』：大正藏四〇・一八一—
 明曠『天台菩薩戒疏』：大正藏四〇・一八二—
 勝莊『梵網經述記』：統藏三八・六八六—
 道世『法苑珠林』：大正藏五三・一一二—
 元照撰・道詢集『芝苑遺編』：統藏五九・一一〇—四
 令集解（歴史民俗博物館藏広橋本）：『国立歴史民俗博物館藏貴重典籍叢書 歴史編一』

- 令集解（国会図書館本・同傍書）：デジタルアーカイブ
 令集解（鷹司家本）：明治大学古代学研究所『令集解』データベースのテキストファイルによる（原書未確認）。
http://www.kisc.meiji.ac.jp/~mekodai/obj_ryoshuge.html
 令集解（石川介版本）：同右
 令集解（早稲田大学所蔵本）：早稲田大学図書館古典籍総合データベース
<http://www.wvl.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html>
 令義解（参考）：『令集解』各本によった。